

池田市埋蔵文化財発掘調査概報

1987年度

1988年3月

池田市教育委員会

池田市埋蔵文化財発掘調査概報

1987年度

宮の前遺跡発掘調査

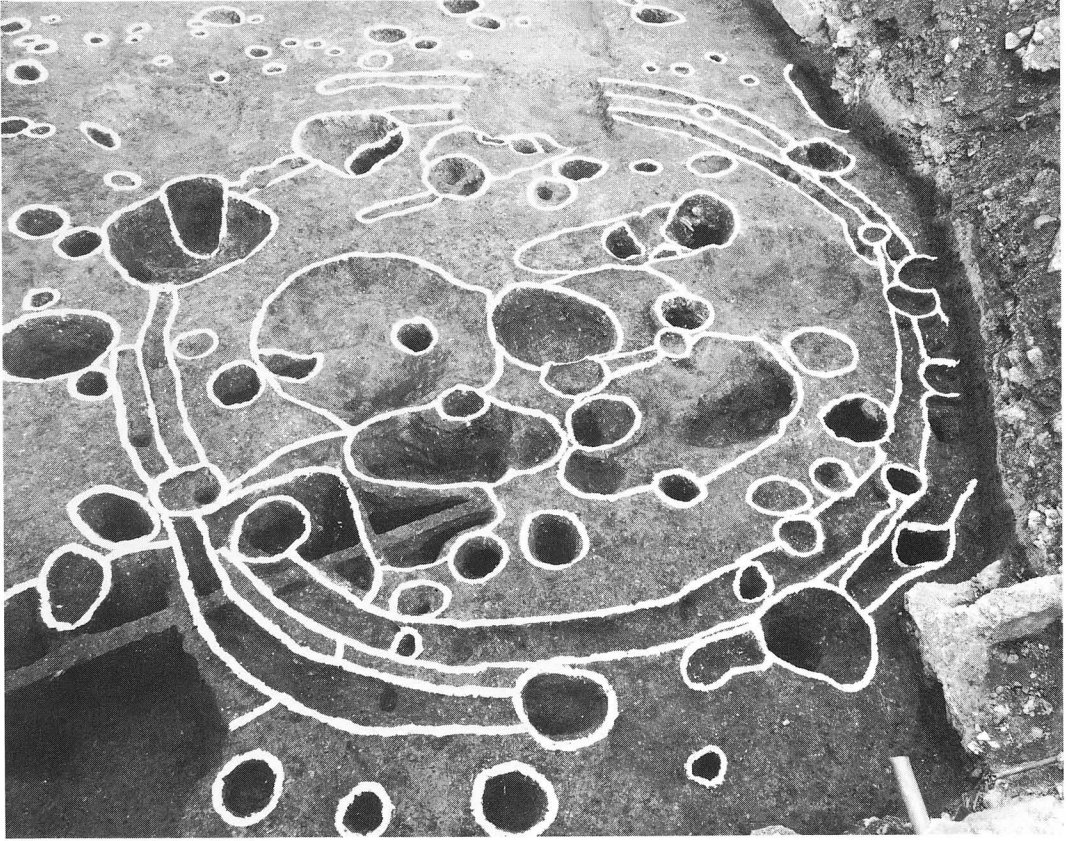
善海1号墳測量調査

1988年3月

池田市教育委員会



宮の前遺跡87-1次調査地SD-1(北から)



宮の前遺跡87-1次調査地SB-1・2(南から)

序 文

池田市は、縁豊かな五月山と雄大な猪名川に生まれ、古代から政治、経済、文化の中心として発達してきました。市内にはこれらのことを物語る多くの文化遺産が伝えられており、中には八坂神社、鉢塚古墳、池田城跡など府下にも知れ渡ったものがあります。

私たちはこれら自然と文化遺産を保護、継承し、また、取り入れることによって始めて、より良い生活環境を追求できるものですが、今日の都市化に伴い、経済を優先させることだけが生活環境の向上につながるという認識が強くなったために、自然や文化遺産を邪魔物として扱うという事態を招いています。この結果、表面的な生活環境の向上とは逆に、私たちの周りにある自然は大きく変貌し、今日まで伝えられ、生活のよりどころとなってきた文化遺産も破壊散逸してきました。

自然も文化遺産も一度破壊されれば二度と復元することはできません。私たちはこのことを十分認識し、保護と継承に努めなければなりません。また、このことが現代に生きるものの責務ではないかと思えます。

この報告書は、以上のことを踏まえ、危機に直面している遺跡について、国及び大阪府の補助を受けて実施した発掘調査の概要報告書であります。調査の実施にあたっては、多くの御指導、御助言をいただいた諸先生並びに関係機関をはじめ、土地所有者、近隣住民の方々には文化財保護に対して格別の御理解と御協力をいただきました。心より感謝と敬意を表し、厚くお礼申し上げます。

昭和63年3月

池田市教育委員会

教育長 片山久男

例 言

1. 本書は、池田市教育委員会が昭和62年度国庫補助事業（総額3,000,000円、国庫50%、府費25%）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査概要報告書である。

2. 本年度の調査地及び期間は下記のとおりである。

宮の前遺跡87-1次	池田市住吉2丁目140-7	昭和62年10月29日～同年11月14日
宮の前遺跡87-2次	池田市住吉2丁目111-1、112	昭和62年11月16日～同年12月9日
宮の前遺跡87-3次	池田市石橋4丁目117-13	昭和62年12月11日～同年12月18日
善海1号墳	池田市畑3丁目5	昭和63年1月5日～同年1月26日

3. 調査は、池田市教育委員会社会教育課文化財係が実施し、田上雅則が現地を担当した。

4. 本書の編集、執筆、写真撮影は田上が行った。また、本書を作成するにあたり、野村大作、石賀英樹、橘田正徳、伊藤由香里、島田 聖、正嶋真理、加美富子、森 郁子の協力を得た。

5. 調査の進行に当たって、池田市文化財保護審議会委員富田好久氏・辰巳良一氏・橘高和明氏、元池田市立池田中学校校長谷田史朗氏、大阪府教育委員会文化財保護課記念物係長中井貞夫氏、同課技師亀島重則氏、大阪大学考古学研究会の学生諸氏より御指導、御助言をいただき、また、調査に際しては、土地所有者、施主並びに近隣住民の方々に深甚なる御理解、御協力をいただいた。深く感謝いたします。

本文目次

I 歴史的環境	1
II 宮の前遺跡発掘調査	4
(1) はじめに	4
(2) 87-1次調査地	5
(3) 87-2次調査地	17
(4) 87-3次調査地	18
(5) まとめ	19
III 善海1号墳測量調査	21

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図	2
宮の前遺跡発掘調査	
第2図 調査地位置図	4
87-1次調査地	
第3図 調査範囲図	5
第4図 遺構全体図	6
第5図 SB-1・2平面図	7
第6図 SD-1土器出土状態	8
第7図 出土遺物実測図	10
第8図 同	11
第9図 同	12
第10図 同	14
第11図 同	15
87-2次調査地	
第12図 トレンチ配置図	17
87-3次調査地	
第13図 トレンチ配置図	18
第14図 出土遺物実測図	18
第15図 第1・2トレンチ平・断面図	19
第16図 87-4次調査地遺構全体図	20

善海1号墳測量調査	
第17図 古墳位置図	21
第18図 石室実測図	22
第19図 墳丘及び周辺地形測量図	25～26

図 版 目 次

宮の前遺跡発掘調査

87-1次調査地

- 図版 1 (1) 調査前の状況
 (2) 調査地全景 (東北から)
- 図版 2 (1) SB-1・2 (南から)
 (2) P-111 (南から)
- 図版 3 (1) 石包丁出土状態
 (2) SD-1 (北から)
- 図版 4 (1) SD-1 (南から)
 (2) SD-1 (東から)

87-2・3次調査地

- 図版 5 (1) 87-2次調査地第2トレンチ (北から)
 (2) 87-3次調査地第1トレンチ (北から)
 (3) 87-3次調査地第2トレンチ (北から)
- 図版 6 87-1次調査地 SD-1出土遺物 (1)
- 図版 7 同 (2)
- 図版 8 87-1次調査地 各遺構、包含層出土遺物

善海1号墳測量調査

- 図版 9 (1) 古墳遠景 (南から)
 (2) 古墳から南方を望む
- 図版10 (1) 墳丘 (西から)
 (2) 墳丘裾部 (南から)
- 図版11 (1) 石室 (南から)
 (2) 石室崩壊状態 (西から)
- 図版12 (1) 石室 (北から)
 (2) 石室細部

I. 歴史的環境

池田市は、東西4.1km、南北9.2kmを測り、南北に細長い市域を形成している。その位置は、大阪平野の西北部、丹波山地に源を発する猪名川が北摂山地を分断して平野部に出たところであり、谷口都市として古くから物資流通や文化交流に中心的な役割を果たしてきた。

地形的に見ると、本市の東北部から中央部にかけて標高400m前後の北摂山地が大きく占めている。この北摂山地の南側はほぼ東西に断層崖が走行して麓との間は急斜面となり、また、この断層崖に直交してV字状の谷が幾つも形成されている。その南麓には複合扇状地の五月山丘陵が発達し、更に南方には比較的平坦な台地が続く。一方、北摂山地の北側は妙見山に源を発する久安寺川によって沖積平野が形成され、その北部には緩やかな古江台地が広がる。市の西側は猪名川によって画され、南に向って肥沃な沖積平野が展開している。

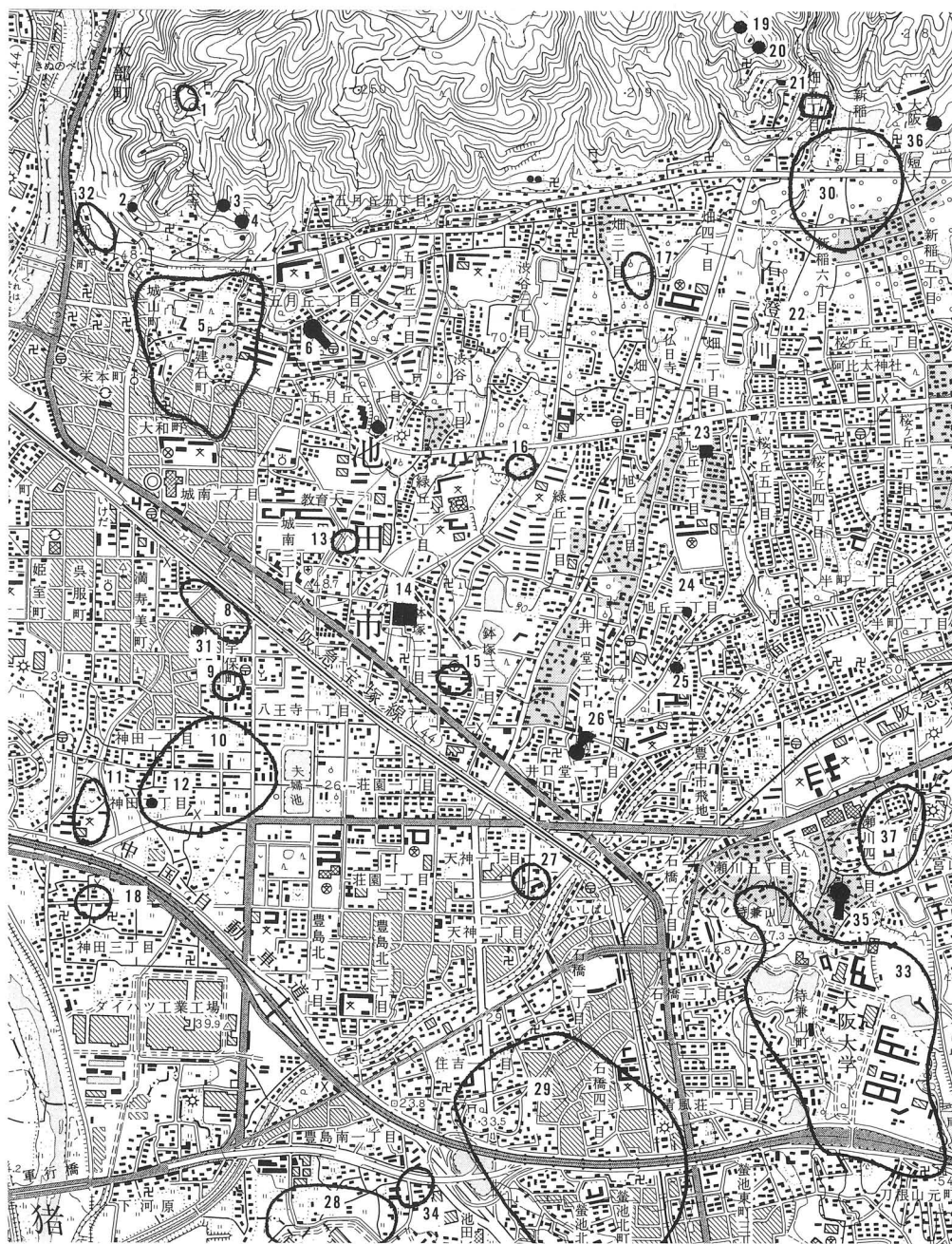
こうした自然地形をもつ池田市には、現在までに旧石器時代から中世に亘る45ヶ所の遺跡が知られている。

旧石器時代の遺跡の実態については明確にされていないが、遺物の出土したものとして伊居太神社参道遺跡、宮の前遺跡がある。伊居太神社参道遺跡は五月山丘陵西端部に位置し、明治年間から石器が採集されその中に少量ではあるがナイフ形石器、尖頭器等旧石器時代に比定される石器の含まれていることが判明しており、また、宮の前遺跡では昭和61年の大阪府教育委員会による調査で1点ではあるが国府型ナイフ形石器が出土している。

縄文時代に至ると、上記の伊居太神社参道遺跡の他、五月山丘陵の京中遺跡で石鏃、石ヒ等が、また、近隣の畑ではサヌカイト製の尖頭器が採集されている。一方、平野部では神田北遺跡で石鏃や石ヒが出土している。しかし、本格的な調査をされたものが少なく遺跡の性格等不明な点が多く、また、当該期の遺跡の増える可能性も十分に考えられる。

弥生時代になると、広範囲に遺跡が分布するようになる。最も古いものとして、前期から後期に亘る土器が出土した五月山北麓の木部遺跡がある。当遺跡はまた、池田市において弥生時代全般を通じて営まれた唯一の遺跡でもある。中期には南方の洪積台地に宮の前遺跡や豊島南遺跡など、沖積平野に生産基盤を置いたと考えられる大集落が出現する。これら二遺跡は方形周溝墓や住居跡が検出され、墓域と居住域の位置関係を考えるうえで非常に重要である。後期になると上記二遺跡は消滅し、鼓ヶ滝遺跡、城山遺跡、神田北遺跡、京中遺跡や、五月山山頂には高地性集落と考えられる愛宕神社遺跡があらたに出現する。

池田市内に見られる古墳は、前期古墳、後期古墳はあるものの、中期に属するものは全くなく、桜塚古墳群や猪名野古墳群との関係が留意される。前期古墳としては、五月山丘陵の鞍部に南面して築造された前方後円墳の池田茶臼山古墳があり、また、五月山中腹には画文帯神獸鏡が出土した円墳の娛三堂古墳がある。後期古墳は、善海1・2号墳、木部1・2号墳、五月



第1図 周辺遺跡分布図

- | | | | | |
|----------------|---------------|-----------|-------------|-----------|
| 1. 愛宕神社遺跡 | 2. 紅葉古墳 | 3. 娛三堂古墳 | 4. 娛三堂南古墳 | 5. 池田城跡 |
| 6. 茶臼山古墳 | 7. 五月ヶ丘古墳 | 8. 禪城寺遺跡 | 9. 宇保遺跡 | 10. 神田北遺跡 |
| 11. 門田遺跡 | 12. 脇塚古墳 | 13. 鉢塚北遺跡 | 14. 鉢塚古墳 | 15. 鉢塚南遺跡 |
| 16. 夏湖池遺跡 | 17. 京中遺跡 | 18. 神田南遺跡 | 19. 善海1号墳 | 20. 善海2号墳 |
| 21. 石積廃寺 | 22. 髪切塚古墳 | 23. 野田塚古墳 | 24. 狐塚古墳 | 25. 石橋古墳 |
| 26. 二子塚古墳 | 27. 天神遺跡 | 28. 豊島南遺跡 | 29. 宮の前遺跡 | 30. 新稲西遺跡 |
| 31. 宇保猪名津彦神社古墳 | 32. 伊居太神社参道遺跡 | 33. 待兼山遺跡 | 34. 住吉宮の前遺跡 | 35. 待兼山古墳 |
| | | 36. 大谷塚古墳 | 37. 瀬川遺跡 | |

ヶ丘古墳等横穴式石室を主体部とする小規模古墳が単独、あるいは2～3基を一単位として分布し、猪名川の対岸に当たる長尾山丘陵に見られるような群集墳は形成されていない。但し、こうした小規模古墳の中にあつて、巨大な横穴式石室を主体部とする鉢塚古墳や、前方後円墳の二子塚古墳はその内容において他の古墳に卓抜しており、畿内中枢部との関係が想定される。

飛鳥時代以降、当時の有力者は権力の示威を造墓活動から寺院建立に求め始め、猪名川流域では金寺山廃寺や伊丹廃寺が建立されるが、池田市においても伽藍配置は不明であるが白鳳時代の瓦が採集された石積廃寺が建立される。一方、西国街道と能勢街道が交差する地点に近い宮の前遺跡では奈良時代の掘立柱建物群が検出されており、郡衙的な役割を担う建物群と推定される。

古代末から中世にかけては、後白河院領として呉庭荘の開発が推進され、後白河院から離れた後も威勢を保ちつつ当地域の政治、文化交流の中心地として栄える。しかし、室町時代以降、国人池田氏の擡頭によって衰退し、池田氏の居館である池田城が政治、文化の中心地となる。

この池田城は、五月山南麓の台地上、標高30～50mに築造された梯郭式の縄張りをもつ中世城郭で、規模は推定で東西330m、南北550mを測る。現在でも堀や土塁が良好に残る主郭部は昭和43、44年に一部調査が行われ、礎石を伴う建物跡や大小の石を配した枯山水様の庭園跡が検出され、池田氏の繁栄を証拠づける遺構として重要視されている。また、近年の調査によって、主郭部の南方100mの位置に大手口が存在することや内堀が幾重にも巡らされていること、あるいは、築城に伴って縄文時代や弥生時代の集落、木棺直葬を主体部とする後期古墳の破壊されていることが判明している。

参考文献

- 富田好久「考古学上に現れた池田」『新版池田市史概説篇』 1971年
橋高和明『原始・古代の池田』池田市立池田中学校池歴部 1985年

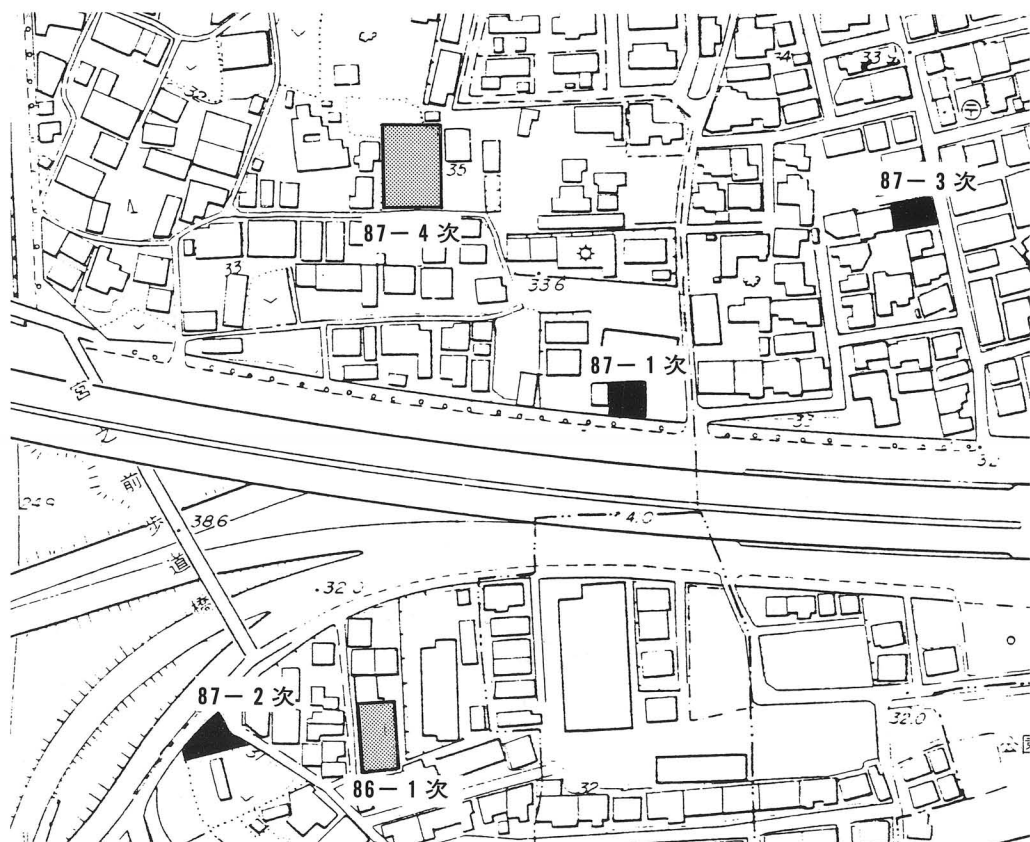
Ⅱ. 宮の前遺跡発掘調査

1. はじめに

宮の前遺跡は、池田市石橋4丁目、住吉2丁目、豊中市蛍池北町にかけて点在する弥生時代から中世に亘る複合遺跡で、その規模は東西700m、南北900mと非常に大規模である。

当遺跡は、古猪名川によって形成された河岸段丘面に位置し、西摂平野を西に望む洪積台地に立地している。この洪積台地は平野部との比高差約10mを測り、周囲に段丘崖をもち平野部からは独立丘陵の様相を呈している。また、台地上は比較的起伏が少なく居住地としての好条件を備え、弥生時代より現代に至るまで累々と生活の営まれている場所である。

宮の前遺跡の発見は、昭和の初頭に地元の学生によって弥生時代の土器や石器が採集されたことを契機とするもので、その後、地元の郷土史家により弥生時代の遺跡として遺物が紹介された。しかし、遺跡の発見以後、およそ40年間は本格的な発掘調査が実施されず、その範囲や性格等全く明らかにされていなかったが、昭和43・44年の中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査において、弥生時代研究にとって欠かすことのできない非常に重要な成果を得ることとなった。この調査は、15,000㎡と極めて広範囲に及ぶもので、当時は発見されてまだ日の浅い弥生時



第2図 調査地位置図

代中期の方形周溝墓が20基検出されたほか、土壙墓、木棺墓や竪穴式住居跡も検出され、墓域と居住域が同時に把握できる希有な例として注目された。また、古墳時代の竪穴式住居跡、墳丘の削平された古墳、奈良時代の掘立柱建物跡、井戸、平安時代以降の掘立柱建物跡も検出され、弥生時代から中世に及ぶ複合遺跡として認識されることとなった。

その後、主として大阪府教育委員会により、民間のマンション等の事前調査として発掘調査が進められ、東西700m、南北900mの範囲に遺跡の広がっていることが明らかにされるとともに、その実態が徐々にではあるが解明されつつある。

当遺跡は、古くから住宅地となり、近年、マンションや個人住宅の新築、改築が増大しているが遺構面まで非常に浅いため木造住宅の基礎工事でも十分破壊される危険性をもつ。

本年度は、こうした状況の中、池田市住吉2丁目140-7、同2丁目111-1、112、石橋4丁目117-13の三箇所において調査を実施した。

2.87-1 調査地

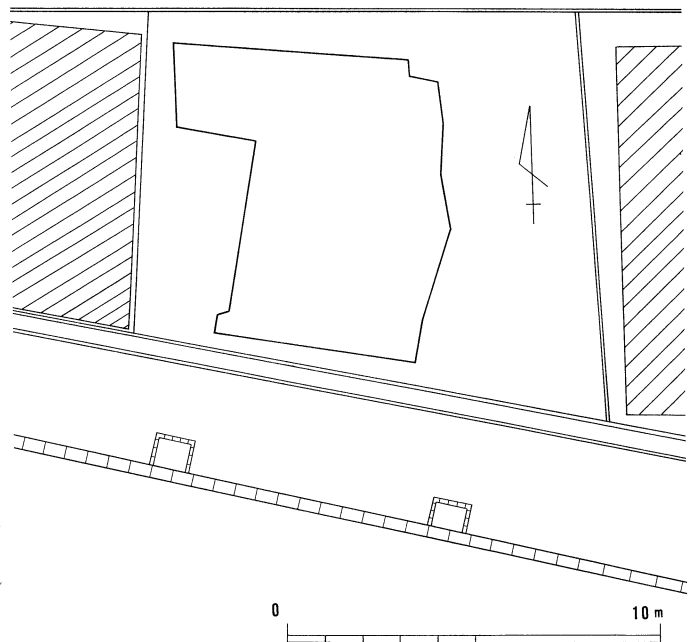
調査地は、池田市住吉2丁目140-7である。店舗付個人住宅の改築に伴う立ち会い調査の結果、弥生時代中期のピットを確認したため建物範囲を対象に調査することとした。調査面積は約60㎡である。

(1) 調査の概要

検出した遺構は、竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝等である。

基本層序は4層からなる。

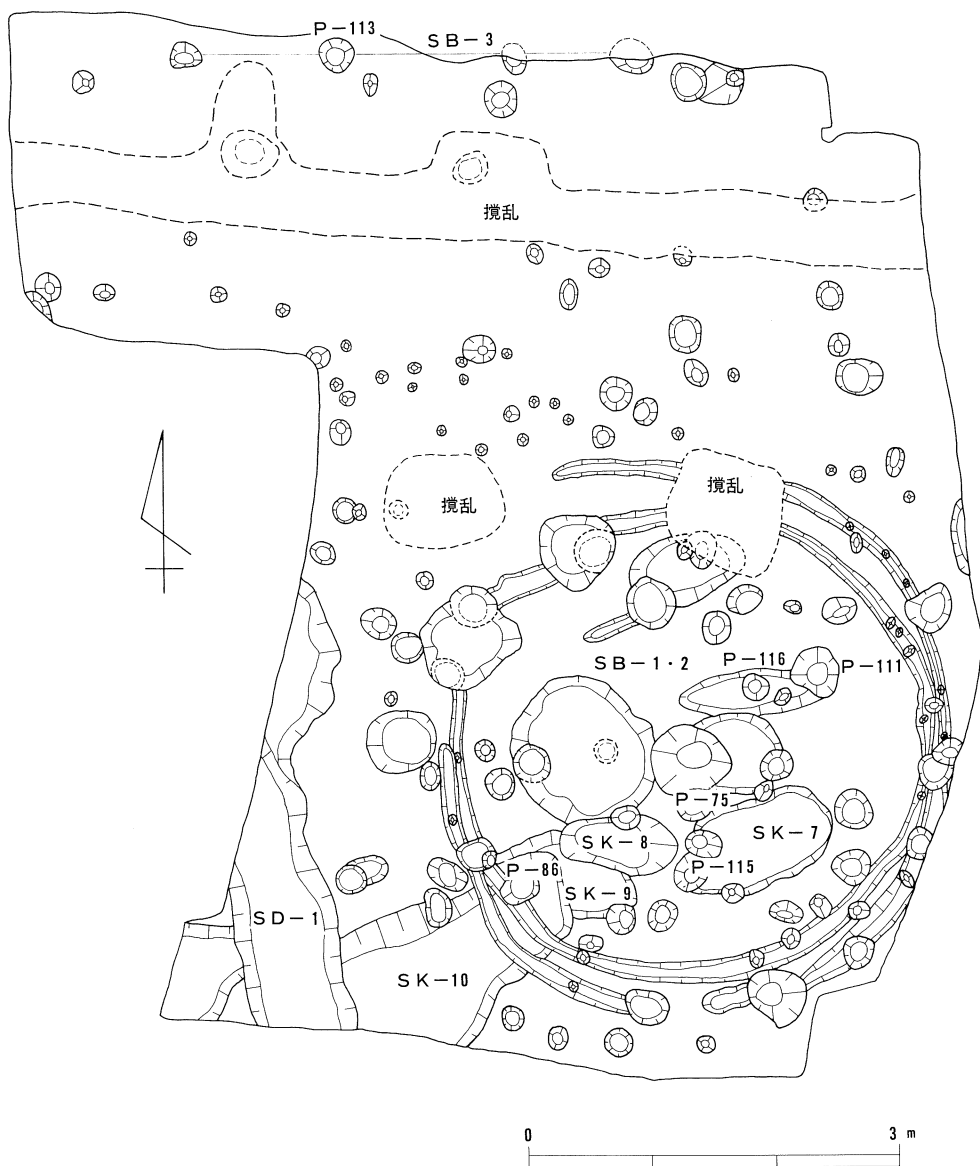
第1層は盛土、第2層は近年まで耕作土、第3層は地山が二次的に移動、流出した暗黄灰色の粘質土で、この層中から弥生時代中期の土器が少量出土した。第4層は遺構検出面である黄褐色粘質土の地山となる。この調査地では後世の削平が著しいため遺物包含層は全く遺存しておらず、また、地山面には建物の基礎や排水路によって一部破壊されている。



第3図 調査範囲図

SB-1・2

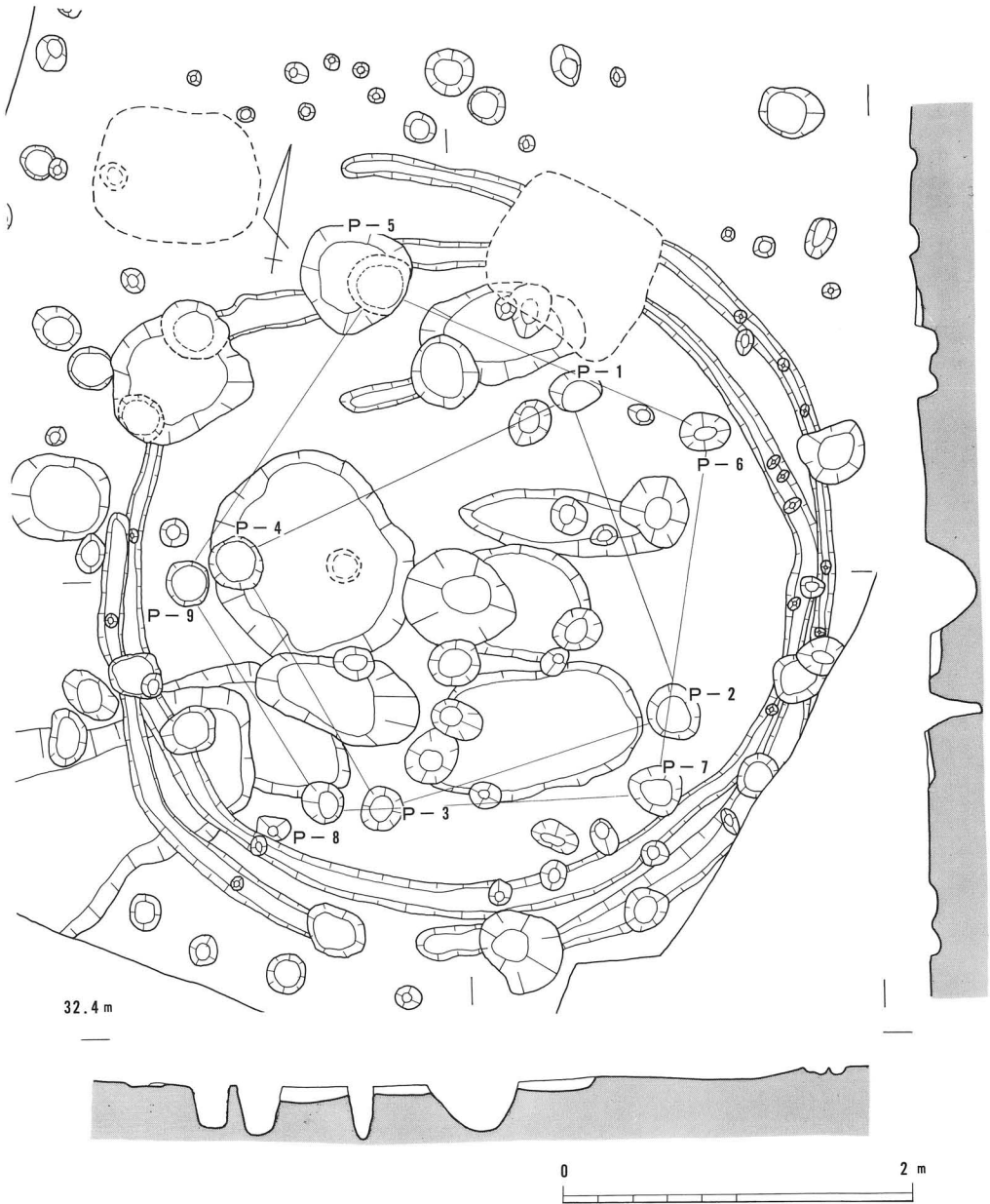
後世の削平が相当著しかったものの、周溝が若干残存していたため竪穴式住居跡として判断するに至ったものである。よって、住居内の堆積土はないが、周溝に囲まれた内側は他の地山面に比べると有機土が多量に混在していることからみて、本来、床であった面は辛うじて残存しているものと判断でき、この面の直上から出土した遺物については住居に伴うものとする



第4図 遺構全体図

ができる。

検出した周溝は二重に巡り、建て替えによって拡張されている。建て替え前の住居跡（SB-1）は東西4.1m、南北3.8mの円形プランを呈し、床面積は約12m²と非常に小規模である。残存していた周溝は幅10~20cm、深さ5cmと浅い。主柱穴についてはP-1~P-4の4本で構成され、各柱穴間の距離は0.8~1.9mを測る。柱穴埋土はよく締まった暗茶色粘質土であるが、中には柱を固定するために柱と掘方との隙間に拳大の礫を結めているものもある。主柱穴の各



第5図 SB-1・2平面図

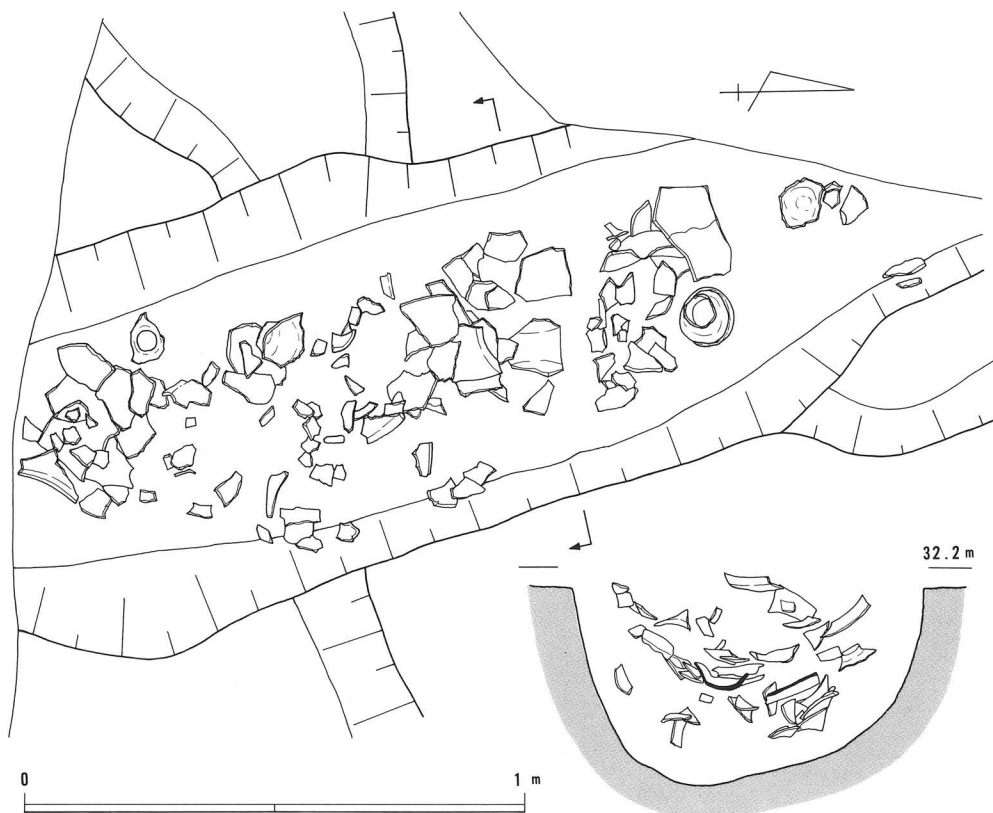
辺を結ぶ中央で長径65cm、短径55cm、深さ24cmの楕円形を呈する炉を検出した。埋土は上層が黒灰色粘質土で下層は灰が堆積していたが、底面及び壁面には焼けた痕跡は認められなかった。

建て替え後の住居跡（SB-2）は、SB-1の炉を中心としてやや北側に拡張されている。東西4.1m、南北4.5mでやや楕円形プランを呈し、床面積は約12㎡を測る。この床面積の数値からすると、SB-1に比して拡張面積が小さいため、居住面積の増大を目的とするものではなくSB-1の老朽化に伴う建て替えとする方が妥当と思われる。周溝は幅10～22cm、深さ5cmで、西北部で1.1mほど掘り残しが認められるが、後述する支柱穴との位置関係からみて、この部分が住居の出入り口に相当するものと推定される。支柱穴はP-5～P-9の5本で構成され、各支柱穴間の距離は1.2～1.8mを測る。

出土遺物は、床面直上で少量の細片化した弥生土器、SB-2周溝内からサヌカイト製の石鏃が出土し、また、SB-1に伴うP-1から弥生時代中期の底部、SB-2に伴うP-7から弥生時代中期の高杯口縁部が出土した。

P-111（図版2）

SB-1・2内で検出した、径40cm、深さ42cmのピットである。土層断面を観察する限りでは柱の痕跡は認められなかったが、側壁に接して拳大の礫が認められたことから、柱を固定す



第6図 SD-1土器出土状態

るために充填しているものと考えられ、柱穴であると判断した。SB-2、3のどちらかに伴う柱穴になるものとも考えられるが、位置的にみてやや不自然であり、この関係については今後の作業に期したい。埋土内から弥生時代中期の甕が出土している。

SB-3

調査区の北辺で、ほぼ東西に並ぶ4基の柱穴を検出した。柱穴の径は20~30cmと不揃いで、また、柱穴間の距離も東から0.7cm、1.2cm、0.95cmとばらつきがある。大部分が調査区外にあるため、全体の規模や住穴構造は不明であるが、東側の柱穴のみ間隔が狭いことから、あるいは2間の可能性がある。柱穴P-113埋土内から弥生時代中期の壺口縁部が2点出土している。

SD-1

調査区の西南隅で検出した、やや東南から西北に走行する溝である。既述したSD-1・2の周溝との距離は1mを測るが、出土遺物から見る限り、同時期のものではない。最大幅1.1m、最深部で0.5mを測り、断面形態は深いU字形を呈する。底面のレベルは南から北に向かって漸次浅くなっており、北側は調査区外で即終わっているものと思われる。一方、南側については昭和43・44年調査の写真図版⁽¹⁾を見ると、このSD-1に該当する溝が西南-東北に走行し北側の本調査区へ伸びており、SD-1の平面形態は逆L字形を呈していることが判る。

溝内からは、個体数にして約28個の弥生土器とサヌカイト製の石鏃が1点出土した。その出土状態を見ると溝の上部から底面まであり、堆積埋土から上下2層に分けて取り上げることができた。しかしながら、遺物整理の段階で上下2層で互いに接合できる資料が多数あったため、上下2層の土器は時期差を示していないことが判明した。

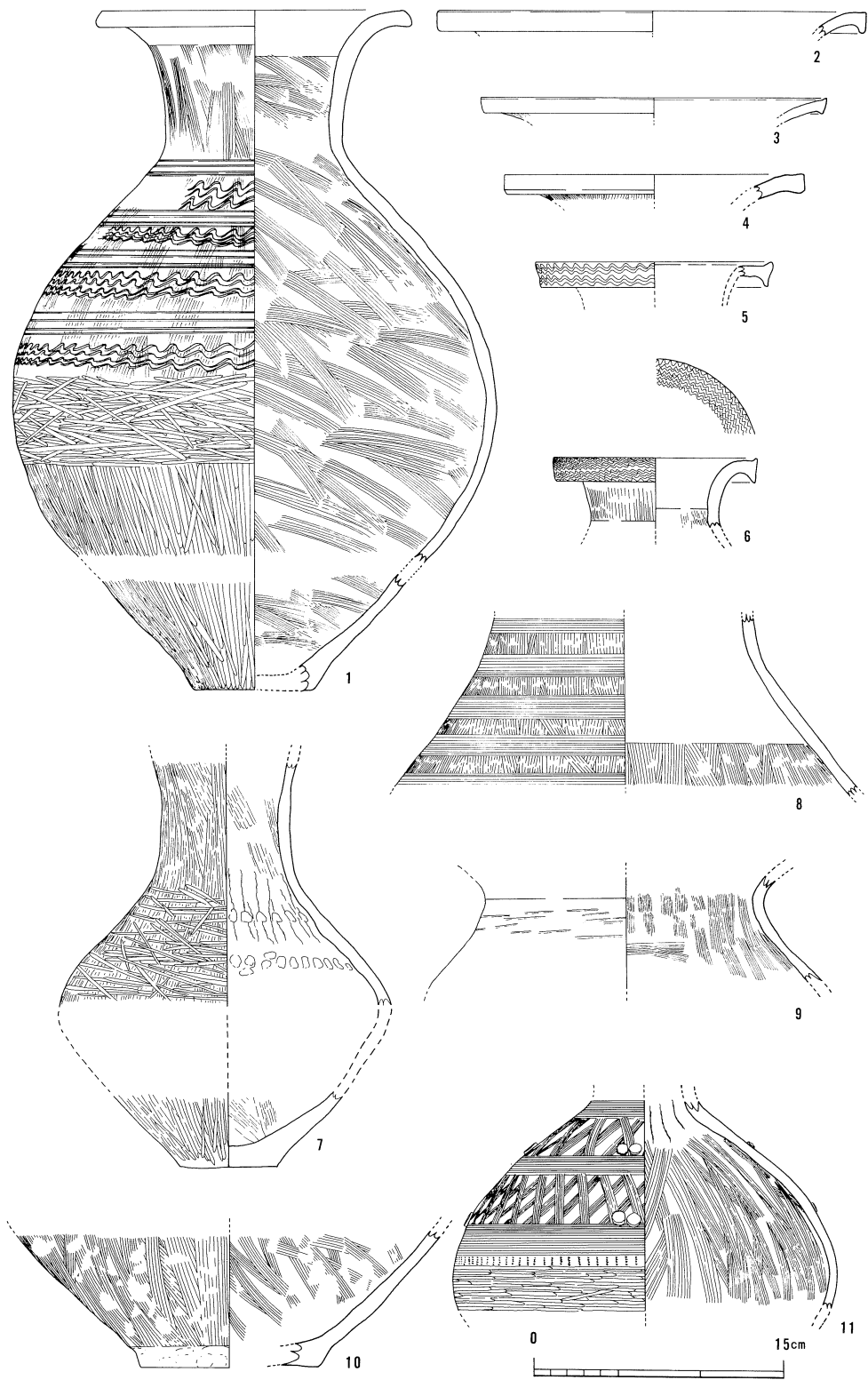
(2) 出土遺物

本調査地より出土した遺物は土器、石器があり、すべて弥生時代中期に属するものである。その大半はSD-1から出土したもので、他に住居跡、土坑、ピット、第3層から少量出土している。以下、土器、石器に分けて述べる。

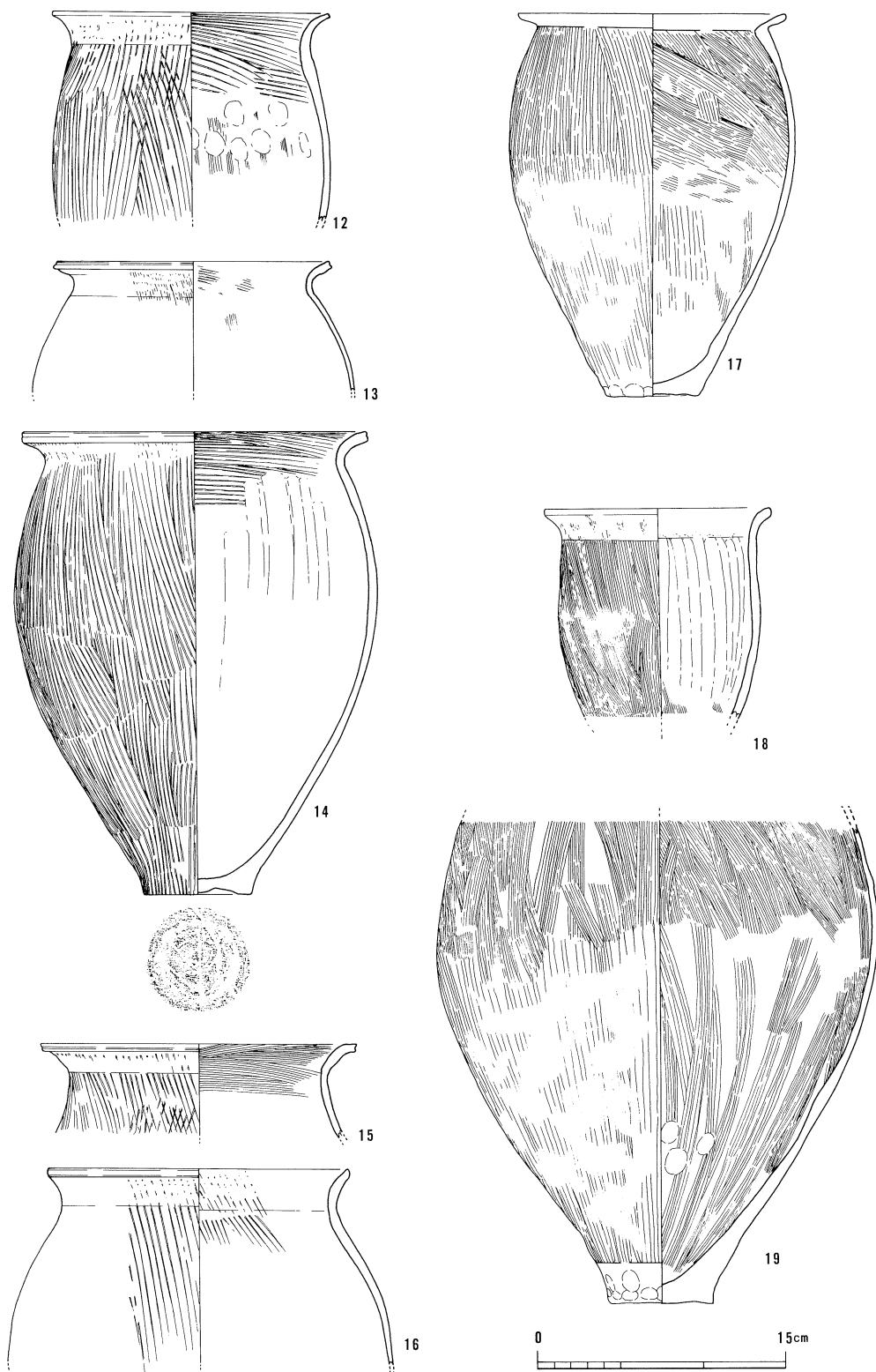
弥生土器

SD-1 (1~26) 器種の判明するものとしては広口壺、長頸壺、甕、蓋がある。

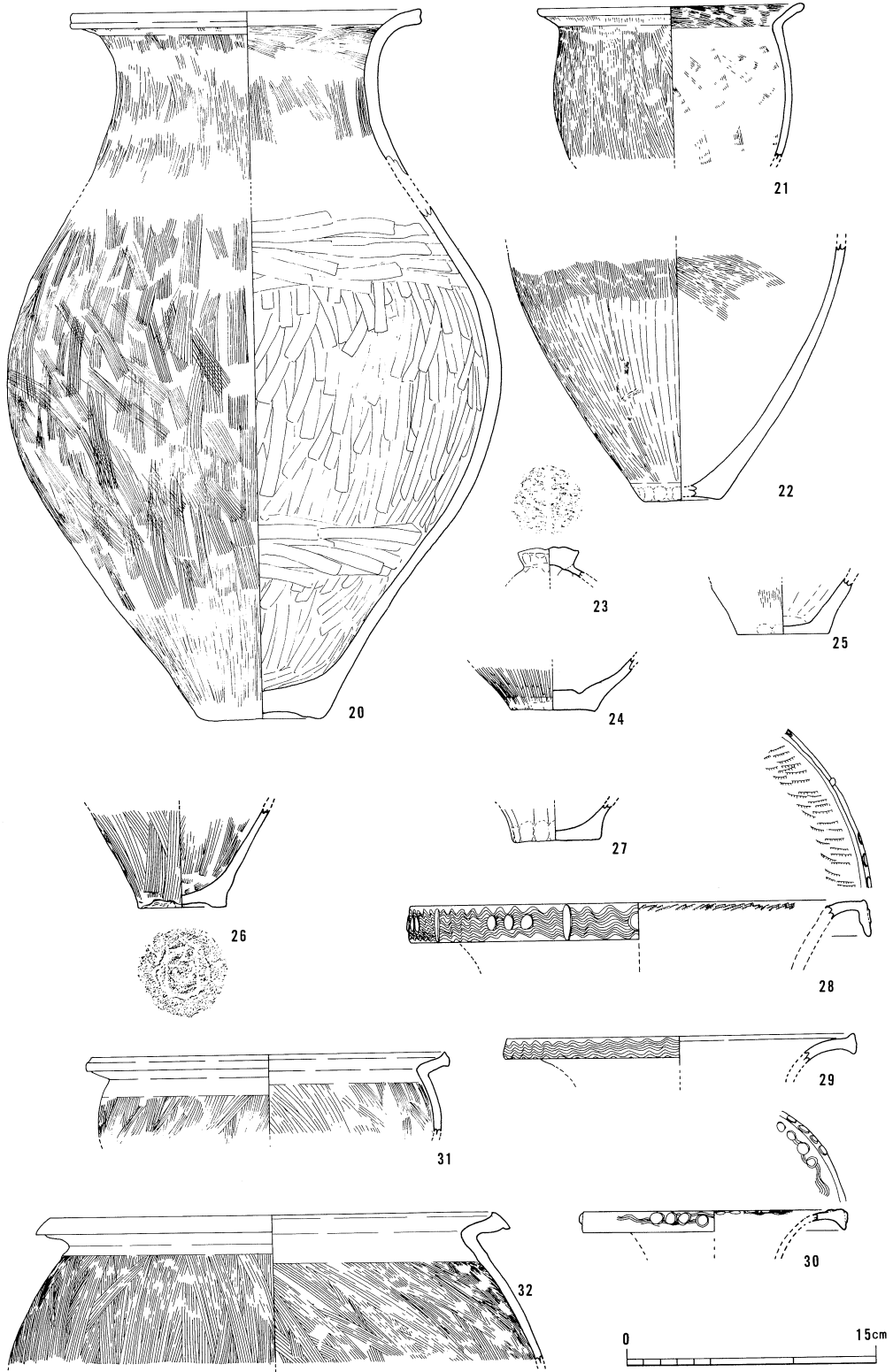
広口壺(1~8、20)は口縁端部を拡張させるものと、若干肥厚させるだけの2種類がある。拡張させるものは小形のものに限られ、このうち(5)は口縁部外面のみ波状文を施すが、(6)は口縁部端面のほか内面にも波状文を施している。口縁端部を若干肥厚させるものではほぼ完形に復元しえたものが2個体ある。(1、20)。(1)は球形の体部を有し、頸部は細くなり、口縁部は外方へ大きく広がる。体部下半部には縦及び横方向のヘラミガキを施し、肩部から体部には、縦方向のハケを施したのち直線文と波状文を交互に配している。(20)はやや太い頸部から如意形に外反する口縁部になり、体部はあまり膨らまない。外面は無文で乱雑なハケ、内面は板ナデを施す。(2)は口縁端部を下方へ垂下させ、(2・3)は若干肥厚させるもので、何れ



第7图 出土文物实测图



第 8 图 出土遺物実測図



第9图 出土遺物実測図

も口縁部のみである。(8)は体部から頸部にかけて縦方向のハケが施され、5条の直線文が残っている。内面はナデおよびハケが施されている。

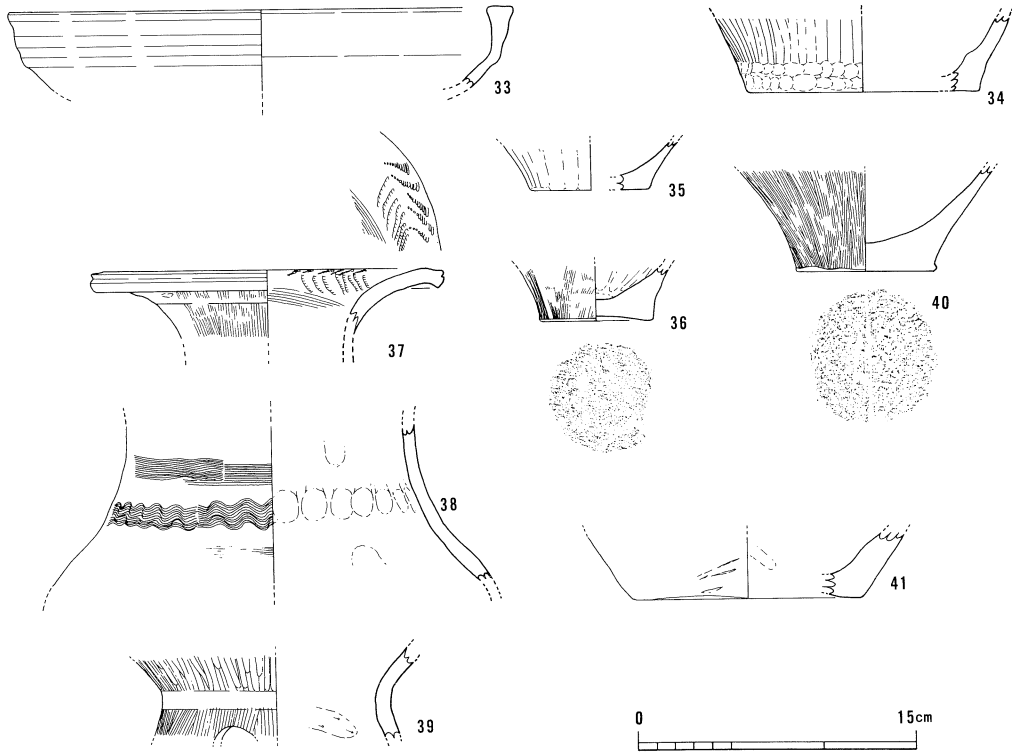
長頸壺は2個体ある。(7)は体部下半部、口縁部を欠損する。肩部は直線的で、太めの頸部はやや外方へ開いている。外面は縦方向のハケを施した後、肩部以下に乱雑なヘラミガキを施している。(11)は下半部、頸部以上を欠損する。玉葱形の体部を有し、頸部に向かって非常に細くなっている。外面にはヘラミガキの後に、3条の直線文とその間に斜格子文、最下段は列点文を配している。施文後、円形浮文を付加するが、細片化が著しいため位置関係については判然としない。内面は縦方向のハケを施す。

(9)は頸部から肩部にかけて残存するものであるが、器種は判然としない。外面は横方向の粗いハケメが部分的に残り、内面には縦及び横方向のハケが施される。(10)は壺底部である。内外面ともハケが施される。

甕は、口径15cm前後の小形甕、20cm前後の中形甕がみられる。調整手法から大まかに2種類に分けることができ、口縁部内面にハケが施されるもの(12~16、21)、ヨコナデで終わっているもの(17、18)がある。前者のうち(21)以外は外面を縦方向の粗いハケ、内面は口縁部から若干肩部にかけてハケが施される。この内面のハケは(12、14)のように外面と同一の原体で横方向に施されるものや、(15)のように外面より細かい原体を用いるもの、また、(16)のように斜め方向に施すものなど調整方法に違いがみられる。ただ、何れも口縁部は肩部から緩やかに外反し、その端部は面をもつが、大和型甕に通常みられるような刻み目は認められない。全体の形状が分かるものは少ないが、体部径が口径を凌ぎ倒鐘形を呈するもの(13、14、16)と、両者のほぼ等しいもの(12)がある。(21)は口が体部径を凌ぎ、口縁部も外方へ屈曲するもので、上記のものとは比べて異質である。後者は体部径が口径を凌ぎ、屈曲する口縁部をもつもので、在地で一般にみられる形態である。(17)は外面下半部を木目の残る板ナデ、上半部は細かいハケで、内面も同様に調整される。(18)は内外面とも細かいハケで調整された後、内面のみナデによって消去される。上記の他に口縁部が欠損するもの(17、22)、底部のみ残存するもの(24~26)がある。(19)はやや大形の部類に属するもので、体部径に比して底部径が小さい。(22)は中形で(19)と同様の形態を呈する。両者とも外面下半部を木目の残る板ナデ、上半部は細かいハケ、内面にはハケが施される。(26)は木葉痕とともに「口」形の痕跡が認められるが、台座の痕跡か否か不明である。(23)は蓋で上部のみ残存している。内側面ともナデで乱雑に仕上げ、頂部には木葉痕が認められる。

SB-1(35) 支柱穴P-1埋土内より出土した底部であるが、器種は不明である。外面は縦方向のナデ、内面は摩滅のため調整不明である。

SB-2(33) 支柱穴P-7埋土内より出土した高杯の杯部である。外面には凹線文が施されるが、内面は摩滅のため調整不明である。



第10図 出土遺物実測図

SB-3 (29、30) (29)は壺口縁部で、端部は上下に拡張し波状文が施される。(30)も壺口縁部端部は下方へ垂下させ、端面および内面に波状文を施した後4個一組の円形浮文を配する。

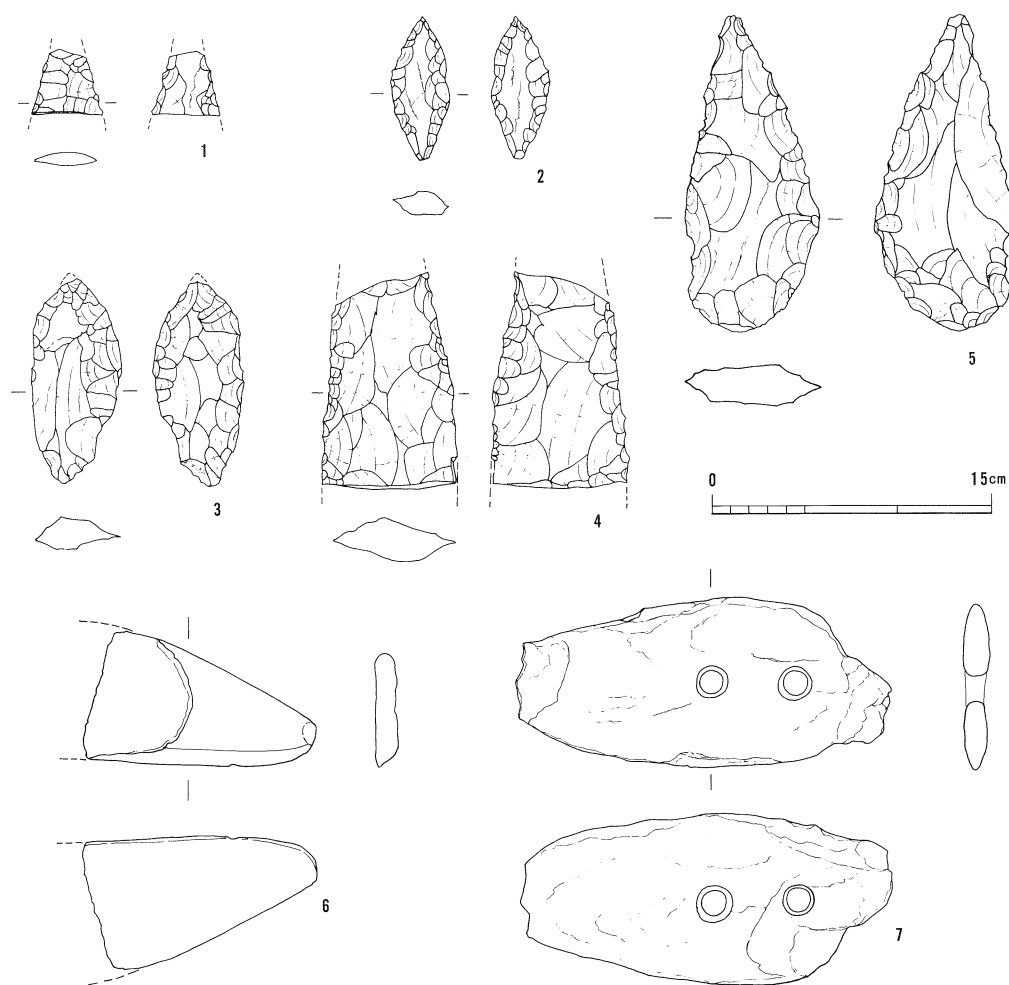
SK-8 (27、28) (27)は甕の底部と思われる。外面は強いナデ、内面は摩滅のため調整不明で、外底面に木葉痕は認められない。(28)は端部を下方へ垂下させる壺の口縁部である。端面には波状文を施した後、3つの円形浮文と棒状浮文1つを交互に配し、内面には櫛描列点文を二重に施す。

SK-10(36) 甕底部である。外面は縦方向のハケ、内面は粗いナデで、外底面には木葉痕が認められる。

P-111(32) 大形の甕で、口縁部から肩部にかけて残存する。口縁部は頸部から外方へ屈曲し、端部は上下に若干拡張させる。内外面とも縦あるいは斜め方向のハケが施される。

P-116(34) 壺の底部と思われる。外面は縦方向のナデの後、ユビによって底部の形状を整える。内面は摩滅のため調整不明である。

第3層内 (37~41) コンテナ数にして1箱分出土しているが、図化したものは5点のみである。(37)は、広口壺の口縁部である。広く外反する形態をなし、端部は心もち下方に向く。端面には1条の沈線があり、内面には羽状の櫛描列点文が施される。外面は縦方向、内面は斜め方向のハケが施される。(38)は広口壺で、口縁部及び体部以下を欠損する。外面には乱



第11図 出土遺物実測図

雑な櫛描直線文と波状文を交互に配しているが、調整は伴然としない。内面はナデと指頭圧痕が認められる。(39)は、器台である。体部から屈曲して受部になり、体部には円形の穿孔が認められる。外面は受部がヘラミガキで体部はハケ、内面は摩滅が著しいが一部ヘラケズリが認められる。(40)は甕底部で、外面は縦方向のハケが施されるが、内面は摩滅のため調整不明である。外底面には木葉痕が明瞭に残る。(41)も底部であるが器種は不明である。摩滅が著しく外面は調整不明であるが、内面には一部ナデが認められる。

石器

出土した石器は7点あり、その内訳は石鏃2点、石槍2点、刃器1点、石包丁2点である。材質は石包丁以外サヌカイトである。この他のサヌカイト剥片が数点出土したが図には掲載しなかった。

石鏃は、SB-2周溝内(1)、P-96(2)からそれぞれ出土した。(1)は、先端部および基部が欠損しているため形態は明らかにできない。片面中央には大剝離面を残し、両側辺は細かい

剥離によって調整している。(2)は、基部が尖基状をなす凸基無茎式で、全長3.7cm、最大幅2cm、厚さ0.6cmを測り、やや厚手である。両面中央には大剥離面を残し、先端部は細かい剥離で調整しているが、基部はやや粗い剥離によってつくりだしている。

石槍は、調査区北隅の遺構面直上(3)、SK-7(4)から出土した。(3)は、最先端部が欠損している現存長5.5cm、幅2.4cm、厚さ0.9cmを測る小型の部類に属するものである。平面は柳葉形で、片面中央には横方向の大剥離面を残し、細かい剥離によって丸みを帯びた先端部をつくりだしている。基部には一部自然面が残る。(4)は先端部および基部を欠損する。幅は3.4cm、厚さ1.1cmで、断面形態は菱形を呈する。両側辺は非常に細かい剥離によって調整し、両面中央には粗い剥離によって鑿をつくりだしている。

刃器(5)は、SD-1から出土した。全長8.8cm、幅3.7cm、厚1.1cmを測る。弧をなす側面から下方にかけては剥離によって分厚い刃部をつくりだし、背となる側面は粗い剥離で直線状にしている。

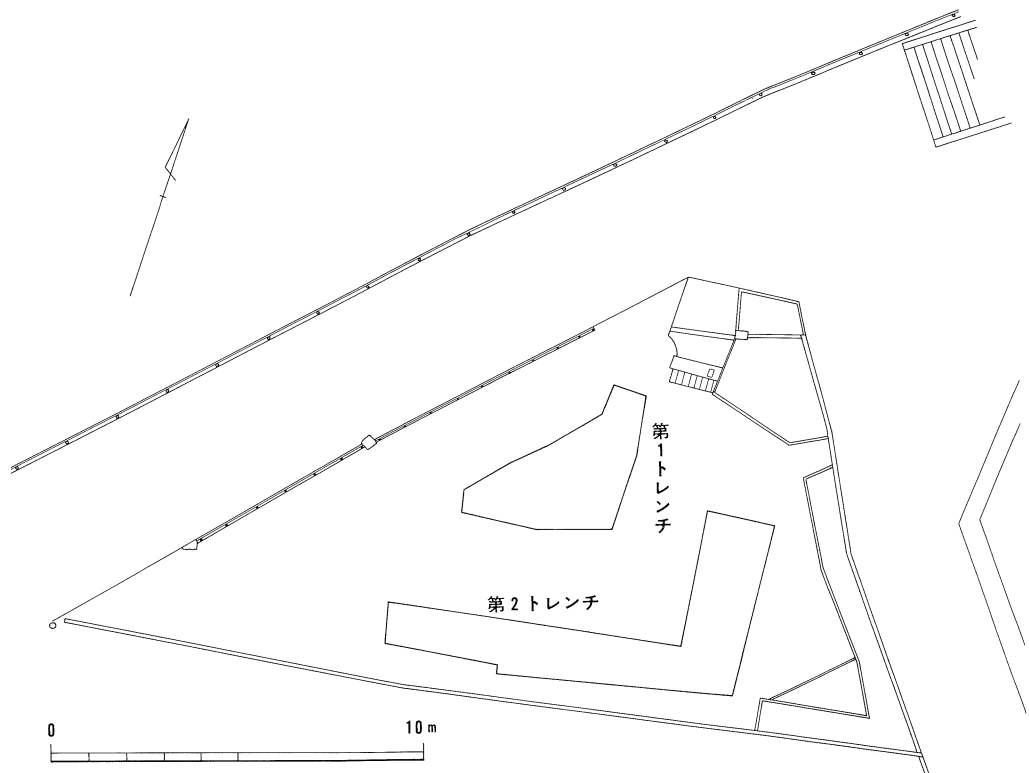
石包丁は、SD-1(6)、P-75(7)から出土している。(6)は緑色片岩製と思われる直線刃形態のものである。厚さは0.6cmを測る。(7)は、結晶片岩製である。両面とも風化が著しく、また、両側面が欠損しているため刃部は不明である。孔は2つとも認められ、径は0.6cmを測る。

3.87-2次調査地

調査地は、池田市住吉2丁目111-1、112で個人住宅の改築に伴う事前調査として実施したものである。本調査地は、昭和43、44年に実施された中国縦貫自動車道路建設に伴う調査地の南に接する。

調査の方法としては、上述した昭和43、44年の調査で、本調査地の東北側において方形周溝墓が3基検出されていることから、まず最初に方形周溝墓の広がり予測して敷地の北側の庭部分にトレンチ（第1トレンチ）を設定した。ここでは削平が著しく遺物包含層及び遺構は全く認められなかった。よって、既存家屋解体後この部分にL字形のトレンチ（第2トレンチ）を設定した。しかしながら、この部分でも削平が著しく遺物包含層及び遺構が認められなかった。但し、本調査地周辺一帯は後世の削平が著しいにもかかわらず遺構が遺存していることに鑑みて、本調査地は元々遺構が存在していなかったものと考えられる。

出土遺物は須恵器片一点のみである。



第12図 トレンチ配置図

4.87-3次調査地

調査地は、石橋4丁目117-13に所在する。共同住宅新築に伴う立会調査において包含層と思われる暗灰褐色粘質土を確認したため、この層の広がり及び遺構の有無確認を目的として基礎部分に2本のトレンチを設定し調査に着手した。

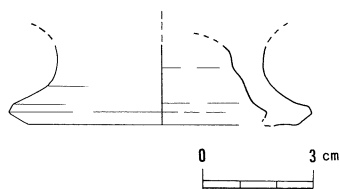
調査の概要

第1トレンチ 敷地の西側に設定した長さ8.5m、幅2.5mのトレンチである。基本層序は4層からなり、第1層は瓦礫を含む盛土、第2・3層は水田に伴う耕作土及び床土である。

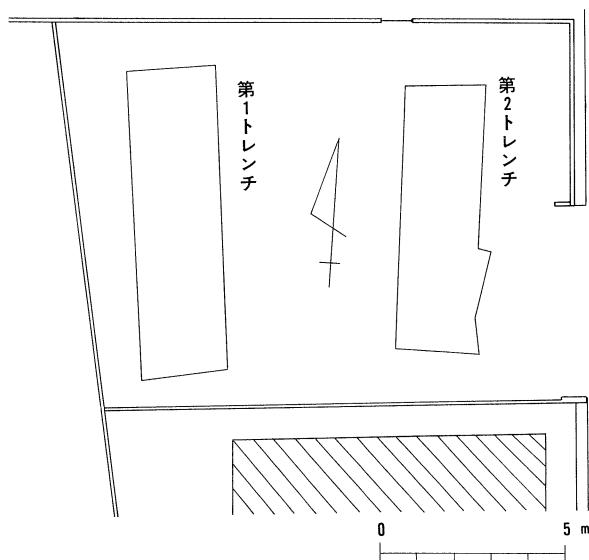
第4層は暗灰褐色粘質土でトレンチの南西隅にのみ認められた。層内には微量ではあるが土師器片を含んでいる。これより下層は地山となるが、当トレンチで検出した地山面は東方向へ緩傾斜を見せており、後述する第2トレンチの地山レベルとの関係から幅の狭い落ち込みが存在しているものと考えられる。但し、上述した第4層の暗灰褐色粘質土が傾斜面まで及んでいないことから、この落ち込みは人為的なものと思われる。

検出した遺構は不定形の土坑のみであるが、深さは僅か5cmしかなく、落ち込みによって削り取られている。この土坑に伴う遺物は無く時期は判別し難い。

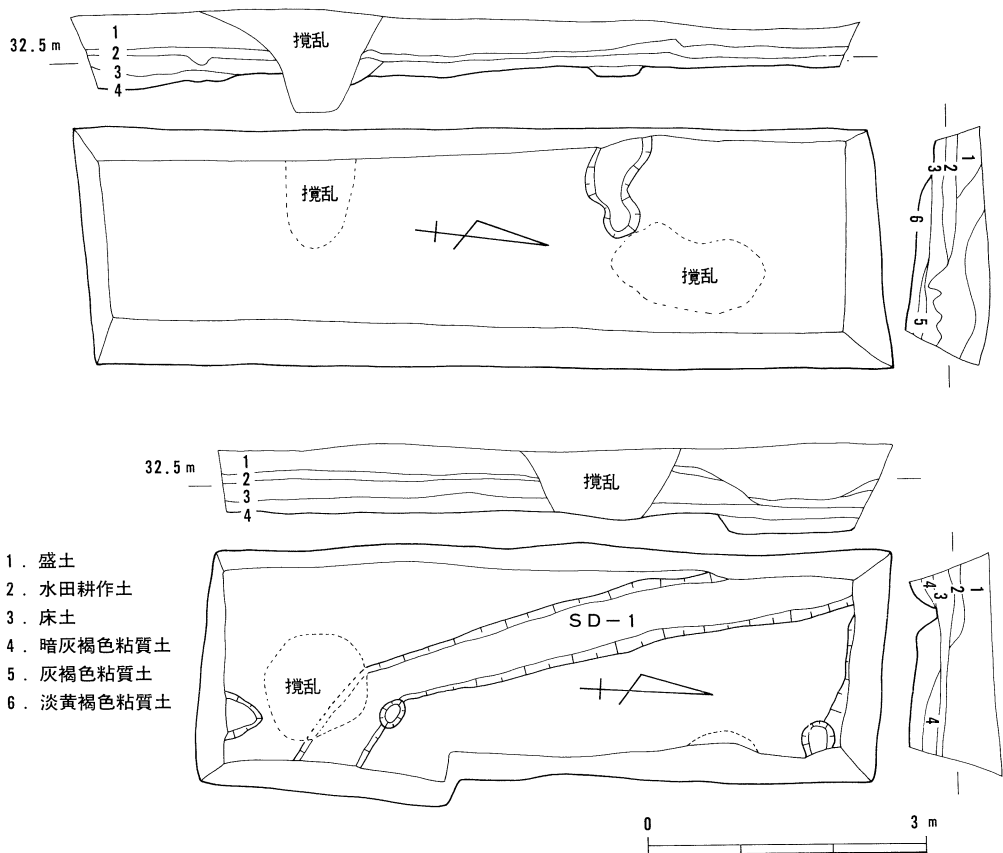
第2トレンチ 敷地の東側に第1トレンチに平行して設定した、長さ74m、幅2.5mのトレンチである。層序は第1トレンチと同様4層からなる。地山面は概ね平坦であり、この上面において溝(SD-1)、土坑、ピットを検出した。SD-1は幅45~70cmで断面形態は緩いU字形をなす。N-15°-W方向に直線に走行し、トレンチ南側で緩く東方向へ屈曲しているが、当調査地の北隣でもこの溝を確認しており、相当広い範囲に互って走行していることが分かる。但し、調査範囲が狭くこれに伴う遺構については不明であるため、溝の機能、用途については明らかにできない。溝埋土内からは須恵器片、土師器片が少量出土したが、図化し得たのは1点のみである(第14図)。低脚部であるが器種は明らかにできない。端部は下方へ僅かにつまみだされ、その外方は丸くおさめている。調整は内外とも回転ナゲによって仕上げている。



第14図 出土遺物実測図



第13図 トレンチ配置図



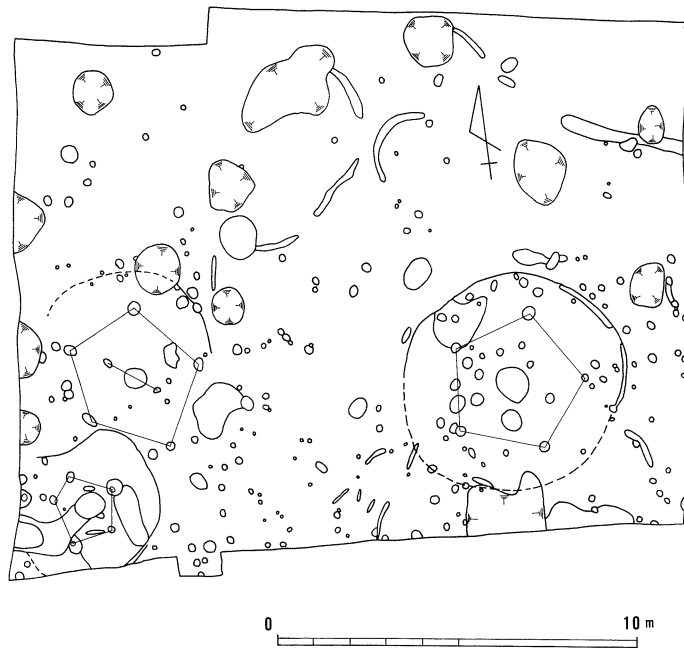
第15図 第1・2トレンチ平・断面図

5. まとめ

本年度の宮の前遺跡発掘調査のうち、87-1次調査地では約60㎡と非常に狭い範囲であったが、建て替えのみられる竪穴式住居跡を検出することができた。出土遺物からみて、畿内第Ⅲ様式新段階のものと思われ、隣接する昭和43、44年の中国縦貫道路建設に伴う調査⁽¹⁾で検出された10棟の竪穴式住居跡等とからめ、集落構造復元にとって大きな成果になるものとする。この住居跡は円形プランで、小規模なものにもかかわらず建替えに伴い主柱穴を4本から5本へ変えているが、本調査地の西北約100mに位置する87-4次調査地⁽²⁾で検出した同時期の3棟の住居跡は、規模に関係なくすべて5本の主柱穴を持つものであった。一方、上述した昭和43、44年の調査地で検出された当該期の住居跡のうち主柱穴の判明するものはすべて4本である。これらのことは主柱穴数の相違が単純に住居の占有面積に比例するものではない事を示しているものと思われるが、これが時期差によるものか、あるいは集落内部にある集団差を反映するものか現時点で検討するにはやや資料不足であり、今後調査を進めていくうえで一つの課題を提示しているものと考えられる。

次の出土遺物であるが、畿内第Ⅲ機式古段階と考えられるSD-1出土のものは個体数にし

て28個と豊富なもので、特に甕の資料は興味深いものである。出土遺物の項でも述べたように大きく2種類に分けることができ、西摂地方で一般にみられるもののほか、外面を粗いハケ、口縁内面にもハケをもついわゆる大和型甕の特徴を有するものが目につく。ただ通常の大和型甕とは口唇部に刻み目を施さない点が異なり、西摂地方の特徴として挙げ得ることを示しているのかもしれない。



第16図 87-4次調査地遺構全体図

当地方において同様の特徴を有する資料として尼崎市田能遺跡銚型ピット⁽³⁾、川西市加茂遺跡55次調査地点土塋⁽⁴⁾があるが、量的には主体を占めるものではなく、本資料の特異さがあらためて注目される。いずれにしても西摂地方における大和型甕の一端を示す良好な資料が得られたといえよう。

註

- (1) 原口正三他『宮之前遺跡発掘調査概報』 宮之前遺跡調査会 1970年
- (2) 1988年2月池田市教育委員会調査。目下、整理作業中。
- (3) 福井英治他『田能遺跡発掘調査報告書』 尼崎市教育委員会 1982年
- (4) 田中達夫、岡野慶隆『川西市加茂遺跡-市道11号線建設にともなう発掘調査報告-』川西市教育委員会 1982年

Ⅲ. 善海 1 号墳

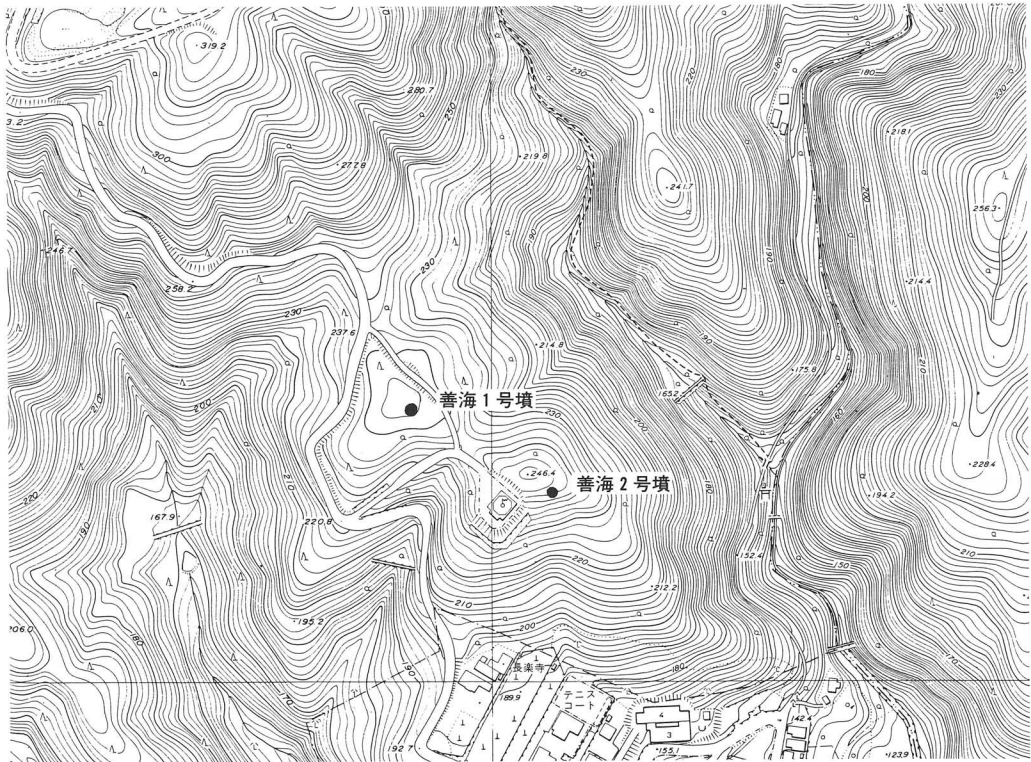
1. はじめに

善海 1 号墳は、池田市畑 3 丁目 5 番に所在する横穴式石室墳で、古くから善海山と称されてきた北摂山地南側の尾根上にある。本墳は、地元の住民に「金の鳥」古墳として古くから知られていたが、古墳として確認されたのは昭和50年になってからである。

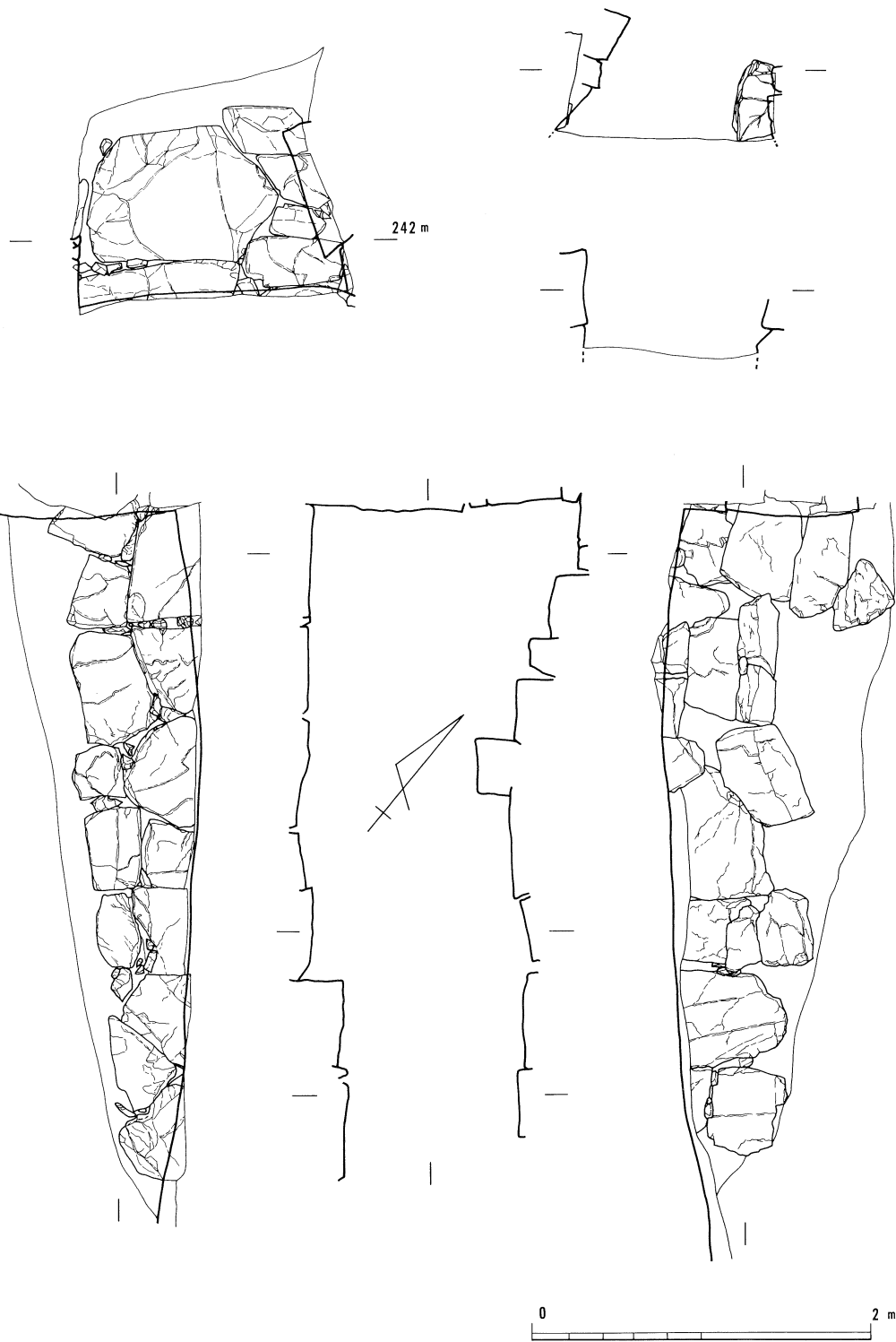
古墳の現状は、既に天井石はすべて失われ、付近には石室に用いられたと考えられる石材が散乱し、しかも封土の流出が甚だしく視覚的には墳形を定めることができない状態である。また、確認された当初から石室の一部が根によって押し出されていたが、近年特に著しくなり、大阪大学考古学研究会の学生より転落寸前の状態になっているとの通報を受けた。そのため本市教育委員会としてはその緊急性を重視し、石室の修復を目的として早急に現状の記録を作成するとともに、応急処置として石室内に土嚢袋を積み石室の崩壊を防止することとした。

2. 立地

本墳は、地田市と箕面市の境を流れる石澄川の西側に位置し、北摂山地南側の中腹、標高約 244m を測る尾根上に築造されている。この尾根は更に二方向に派生し、その東側の尾根の南端には善海 2 号墳が築造されているが、その現状は封土の流出が甚だしく、また、横穴式石室



第17図 古墳位置図



第18図 石室実測図

の奥壁が一部残存しているにすぎない。

本墳の立地する地形を詳細にみてみると、尾根頂上部より若干南へ下った、南方へ発達する尾根が南東および西へ分岐する地点に選地されており、いわゆる山寄せ立地をみせている。この地点から南方を望むと、尾根が両側へ広がった状態となって視界が広がり、池田市内はおろか大阪湾や遙か淡路島も見渡すことができる。

3. 墳丘

上述したように、墳丘は山寄せ立地によるもので、墳丘の北側後背はすぐ尾根頂上部があり、また、尾根が分岐する地点であるために南側は急斜面となる。

測量図を観察すると、墳丘南側の241.50～241.75mラインで旧状を残し、弧状を呈するとともに0.7～1mの平坦部が認められる。しかしながらこの部分以外は墳丘の形状が明確に表れない。また、墳丘西側でもやや弧状を呈するが、丘陵斜面との区別は不明瞭である。

墳丘の形状が明確となる南側を詳しく見ると、241.50m以上のコンターラインが弧状に走るが、墳丘後背まで達せず西方の尾根先端方向へ流れ、現状では南側斜面へ弧状に張り出した状況を呈している。このことから、封土の流出で変形しているとは言え、南側斜面をかなり意識して築かれているものと考えられる。また、241.50mのコンターラインを墳丘裾とすると墳丘後背部との比高差はほぼ2mを測ることになり、石室正面側は墳丘として整え、後背部は山側と区別するための溝が設けられているものと想定される。

墳丘の平面形は、将来発掘調査によって明確にされると思われるが、ここでは上記のことから径10mの円墳と推定しておきたい。

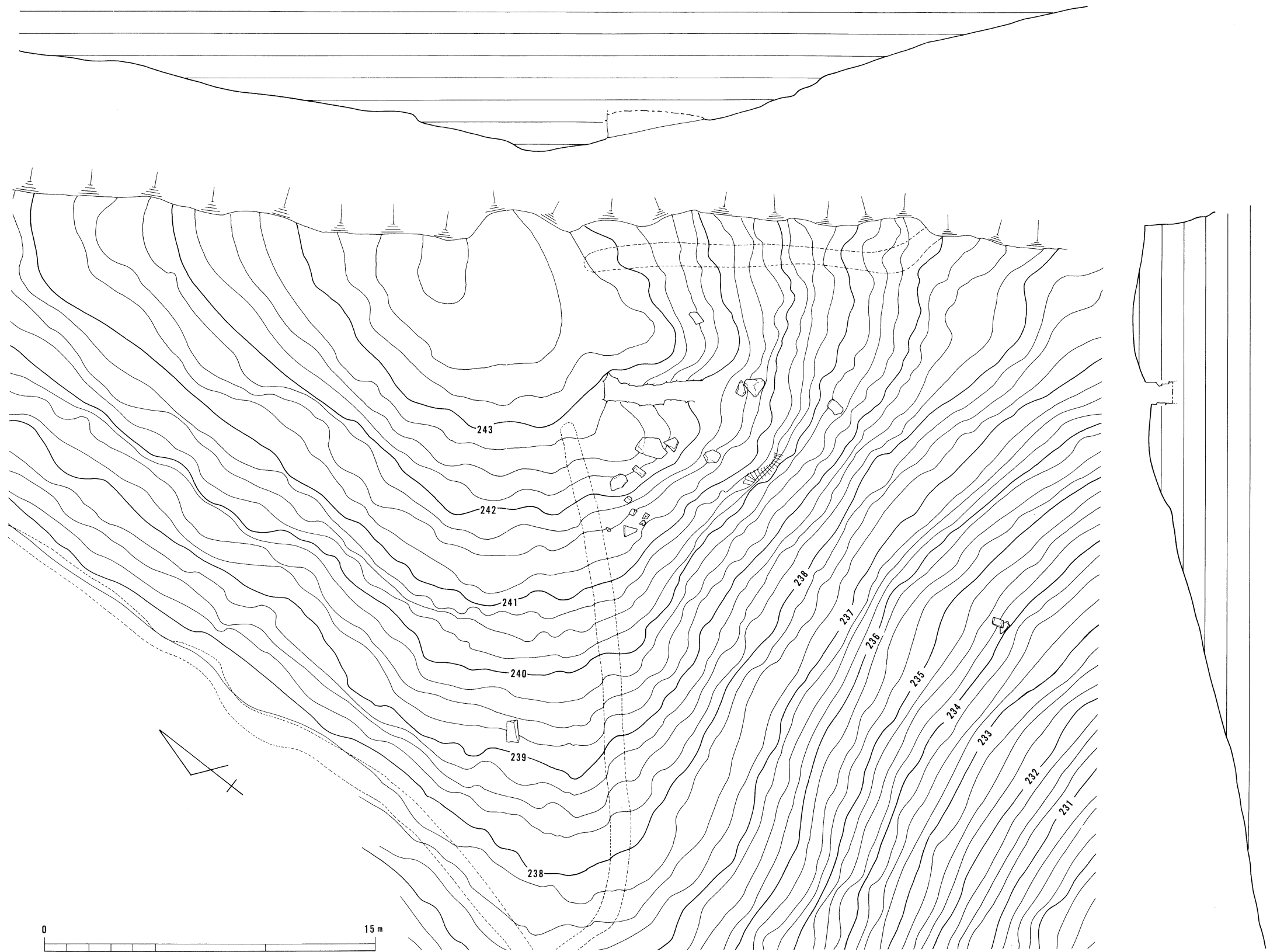
4. 石室

前にも触れたように天井石は既になく、東側壁も大きく崩れている。また、石室上部は総て失われ、本来の石室高を知ることはできない。現存値は全長3.94m、玄室長2.77m、奥壁幅1.58m、同高1.1m、玄門幅1.1m、羨道長1.17m、同高1.01mを測り、主軸はN-40°-Eにとる。平面形態は現状では片袖式に見えるが、奥壁幅と玄門幅との位置関係、また、玄室の東側壁が内側へ押し出されて原位置を保っていないことから両袖式の可能性が強い。

石室の構築は石材の重なりから観察して、まず、玄室部に現状の第1段に概ね同規模の石材をならべるが、奥壁と両側壁の関係については東側は側壁が奥壁の外側に、西側では逆になっており、第1段の構築順序は明らかでない。ただ、西側では東側との長さを調整するためか、奥壁に接する石材とその隣との隙間には小石を充填してずらしている。この手法が両側壁の長さを調整するものであるならば、東側の側壁によって玄室の長さを決定しているものとも考えることもできる。奥壁第2段目は大形の石材を使用しその隙間には小形の石材を充填しているが、側壁は第1段目とほぼ同規模のものを使用し横方向の目地を揃えている。この目地は羨道方向に向ってやや下がっているが、これより上部は失われておりどのような積み方がなされている

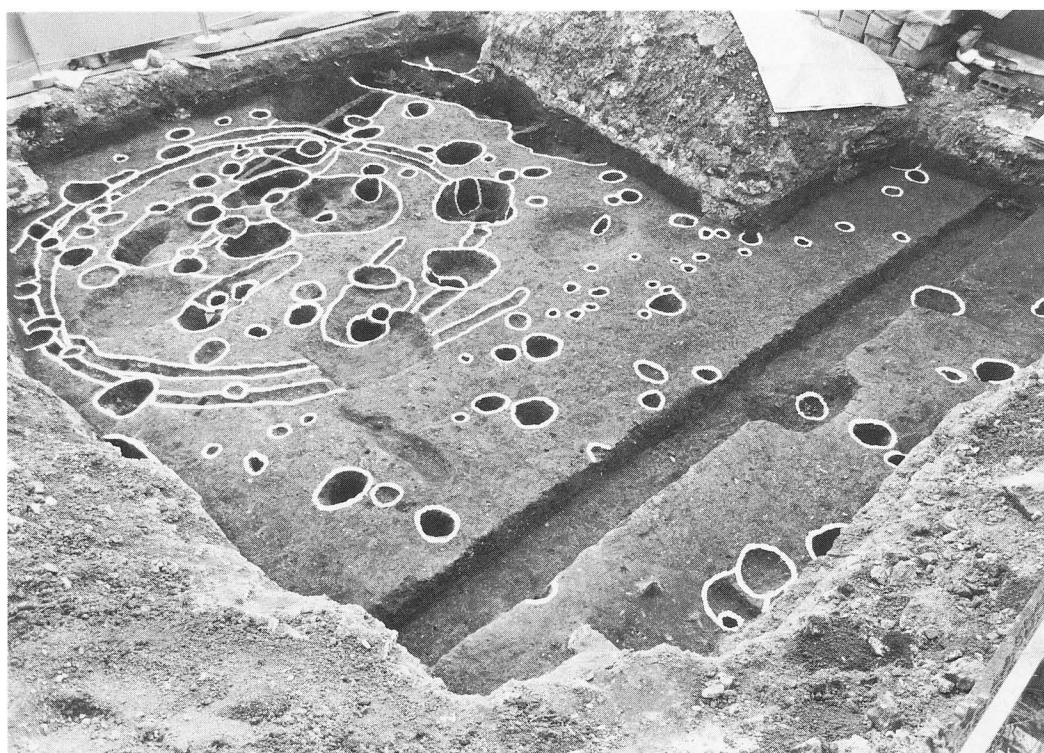
か判らない。ただ、袖部で第2段目が終わっていることから、玄室と羨道とでは石材の段数を意識的に違わせているものと思われる。奥壁及び西側壁を見ると、割石の平坦面を内側に向けほぼ垂直に積んでおり、また、隙間には小石を詰め安定を保っている。

尚、ピンポール探査によると石室内には約30cmの堆積土があり、石室の基底部等不明な点が多い。ただ、東側最下段は辛うじて原位置を保っている可能性があり、今後の発掘調査によって詳しいことが判明するものと考えられる。

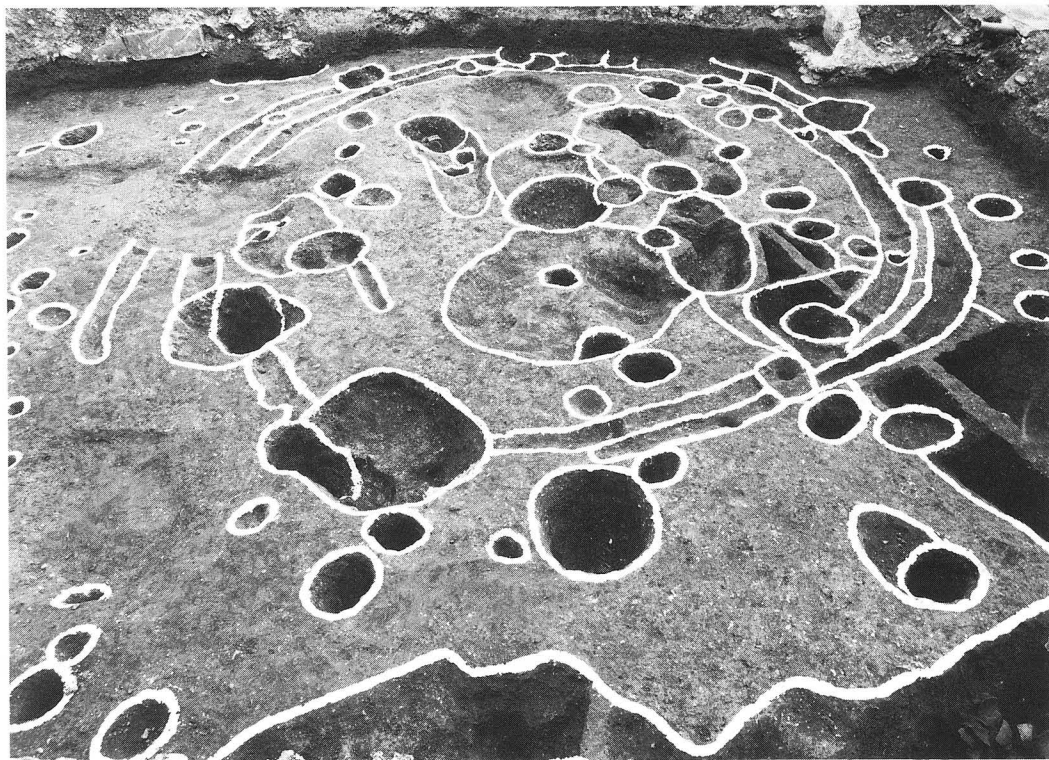




(1)調査前の状況



(2)調査地全景（東北から）



(1) SB-1・2 (西から)



(2) P-111 (南から)



(1) 石包丁出土状態



(2) SD-1 (南から)



(1) SD-1 (東から)



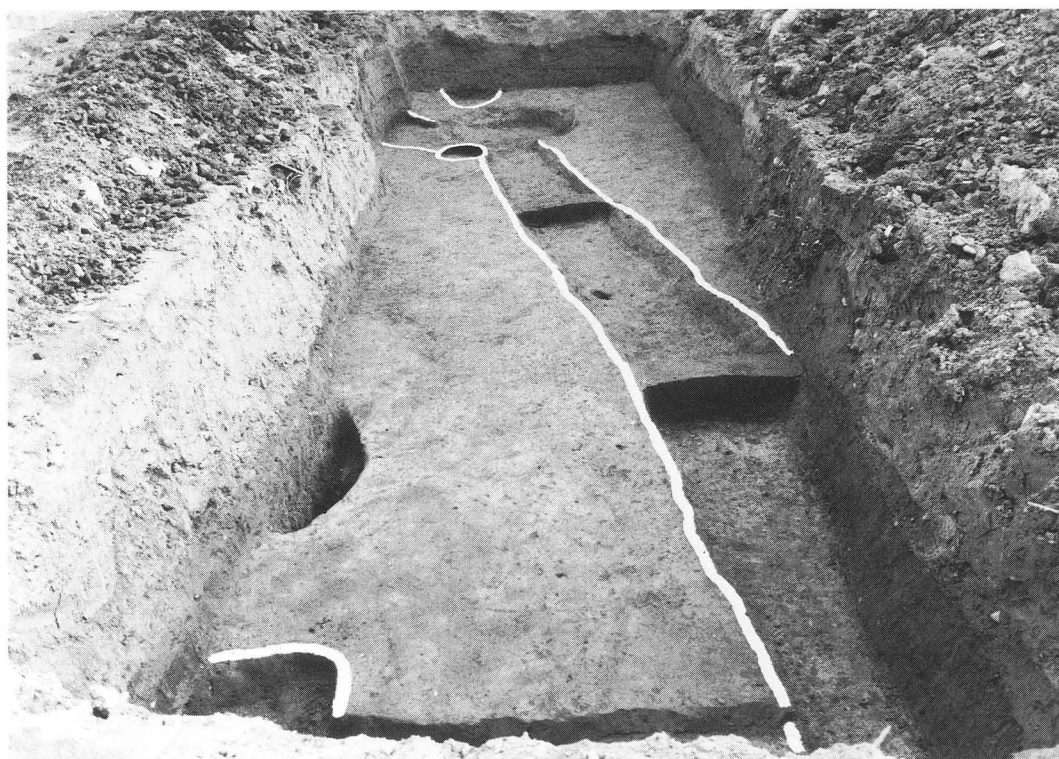
(2) SD-1 (土器取り上げ後)



(1) 87-2次第2トレンチ(北から)



(2) 87-3次第1トレンチ(北から)



(3) 87-3次第2トレンチ(北から)

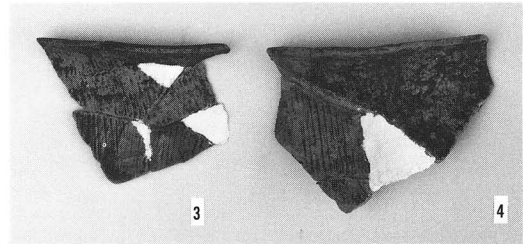




1



2



3

4



5



1



2



3



4



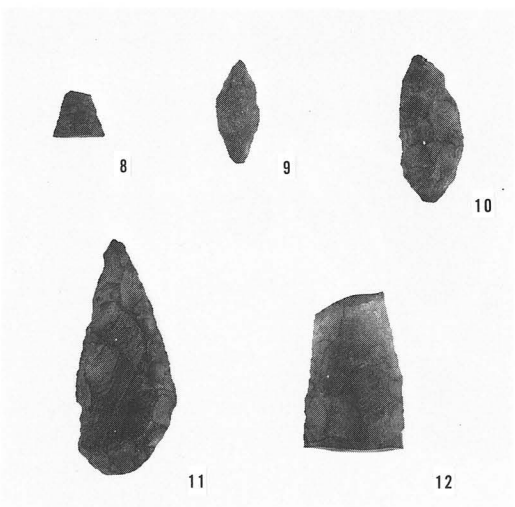
5



6



7



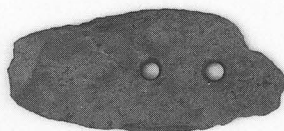
8

9

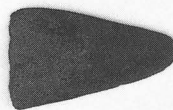
10

11

12



13



14

1・2・11・14 SD-1、3・4 SB-3、5 SK-8、6 P-111
7 第3層内、9 P-96、10 SK-7、12 遺構面直上、13 P-75



(1) 古墳遠景（南から）



(2) 古墳から南方を望む



(3) 墳丘 (南から)



(4) 墳丘裾部 (南から)



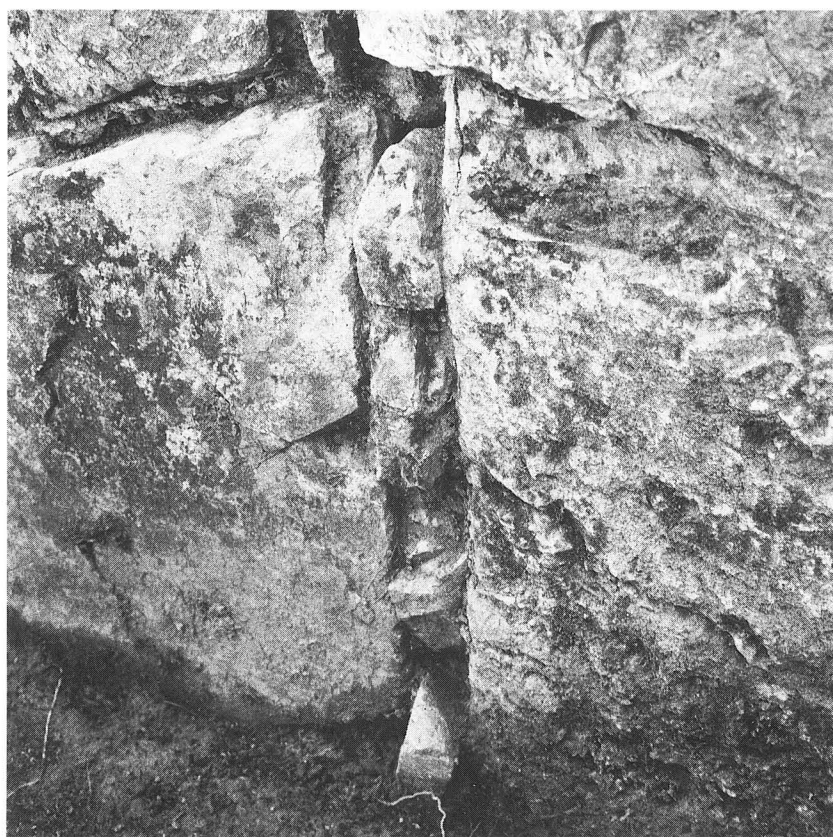
(5) 石室（南から）



(6) 石室崩壊状態（西から）



(1) 石室 (北から)



(2) 石室細部

池田市文化財調査報告第7集

1988年3月

発行 池田市教育委員会

池田市城南1-1-1

編集 社会教育課 文化財係

印刷 (株)じんのう